

秀賞

共に

青森県新郷村立新郷中学校

2年 前山 聖奈

「お母さん、癌なんだ……。」

そう告げられた日から、今日までの2年間は、私にとって本当に苦しく、つらく、けれど涙が止まらなくなるほど家族の温もりを感じる時間でした。

小学校6年生の、1学期終業式。明日から始まる夏休みに、胸を躍らせて帰宅した私を待っていたのは、父のその一言と、うなだれて座る母の姿でした。

「本当なの？ お母さんは、どうなるの？ 家族はどうなるの？ 私はどうすればいいの？ 嫌だ、絶対に嫌だ！」

不安と恐怖、そして「死」という現実が一気に私を襲いました。それ以来、来る日も来る日も母の死を考えない日はありませんでした。ネットで検索しても、治療、手術、生存率——、何一つ安心できる言葉は見つけれられません。母の顔を見るたびに涙がにじんで、母は困ったように笑いました。そのうち私は、考えることに疲れ、学校に行くことも、友達に会うことも、すべてが嫌になってしまったのです……。

けれどある日、家事など全く手伝ったことのなかった姉が、洗濯機と格闘していました。台所では、農作業から帰ったばかりの父が、冷凍のチャーハンを炒めています。その姿は「家族で力を合わせれば、できないことはない。いつも一番そばで支えてくれたお母さんを、今度はみんなで支えよう。」と語りかけているようでした。その時、私は初めて気づきました。自分がどんなにつらく悲しい気持ちでいても、うずくまっていたくても、時間や周りの人は待つてはくれないし、大事な一日一日は過ぎて行きます。それならば、母のくれた身体を、頭を、心を、目いっぱい動かして、母が安心して入院できるように過ごさなければならなかったのです。

まだ幼い保育園の弟だけはどうしても大変なので祖父母にあずかってもらい、炊事、洗濯、掃除、誰かがつらくなったらみんなで助け合ってこなしました。抗癌剤治療で母の髪が抜け落ち始めると、母と私と姉の3人で互いの髪を切り合い「おそろいだね」と笑いました。きちんとできて最高に嬉しい日もあれば、疲れて叫びたい日もありました。けれどその全てが、母と共に、家族と共に、「生きている」という実感でした。

春を待つて、5月末に母は入院し、6月に手術を受けました。病院の母から、「成功したよ」とLINEがきたとき、もう一度だけ涙が出ました。帰って来

た母は少し痩せて、髪の毛も全部なくなっていました。「どんな姿でもいい、生きていてくれるだけで。」と、心の底から思えました。

母は、身をもって教えてくれたのです。今日も流れる、感染症や自然災害、事件や事故のニュース。その命の危うさは、どれも「自分のすぐそばにある」ということ。また、亡くなった方一人一人に、懸命に生きた「人生」があり、「家族」があったということ。だからこそ、目の前に在る命は絶対に大切にしなければならないのです。

先日、グループLINEに友達が書き込みました。

「3階から落ちたらどうなるかな？」

宿題の問題のようで、クイズのようで、誰も気にとめなかったそのつぶやきが妙に気になって、私は勇気を出して返信してみました。

「どうしたの？ 何かあった？」

「人間関係かな……。」

友達は、ぽつりぽつりと悩みごとを話し始めました。そして最後に「聞いてくれて、ありがとう。」と言いました。

今日も会えた母の笑顔に、私は心の中で問いかけます。

「これでいいよね？ 自分の命も、相手の命も、大切にできる大人にきつとなるからね。だからお母さん、もう少しだけ甘えていい？ その日まで待ってて。」

術後5年が経過して、わが家にさらなる安心が戻る日まで、あと4年。18歳になった私は、きっと笑っているはずです。明日から始まる夏休みに胸を躍らせて、照りつける太陽の下で、ひまわりのような満面の笑みで。

母と共に、家族と共に。